清末（1895-1911）における中訳日本書の一考察
―西師意の場合―

舒　志 田

１．　研究目的

19 世紀と 20 世紀早期の中国に於いて、西洋からの知識は書籍の翻訳などを通して幅広く紹介されていた。

ここで取り上げる「清末」という期間は、具体的には日清戦争（中日甲午戦争 1894-1895 年）以降から中華民国成立（辛亥革命 1911 年）までの十数年間である。この期間は中訳日本書の「過渡期」と言われ[(1)]、中訳日本書が盛行しはじめた時期である。その背景には、主に二つの要因があると思われる。

第一は周知の通り、日清戦争の敗北による刺激である。これまで「東夷」として見下ろされてきた日本が西洋の新しい知識の吸収を通して明治維新以降、近代化を成し遂げたことで中国よりも強くなった事実に刺激され、中国の有識層が危機感を抱きはじめ日本に学ぼうという機運が高まってきたのである。

第二は、いわゆる「同種同文」の利便性によるものである。日本語には漢字表記語があり、これが日本の近代西洋知識の摂取の重要な担い手になった為、そのまま中国側に借用されることが可能だったという。

この二点については、例えば 20 世紀前半に中国で発行された書籍にも次のように言及されている。

> 不精其学不明其義、虽善訳者理终隔阂、則有書如無書也。且伝訳西書才難費鋸、所得復少。日本講求西学年精一年、聘其通中西文明専門学者、翻訳諸書、厥資較廉、各省書局蓋創行之。　（徐維則輯・顧燮光増補『増版東西学書録』　1902 年・書録例目）

> 日本文訳本，則以光緒甲午我国與日本構衅，明年和議成，留学者咸趋其国，且其文字訳較他国文字為便。于是日本文之訳本遂充斥于市肆、推行于学校，幾使一時之学術寝成風尚。而我国文体亦遂因之稍稍変矣。　（顾燮光『訳書経眼録』1934 年・序）

この清末という期間に於いて、科学及び政治などの語彙が古い漢語から新しい言葉に殆ど取って代わられた。その状況下で、日本語を仲立ちとした中訳日本書が果たし

た役割は非常に大きいのである。

この時期（1896－1911 年）の中訳日本書は譚汝謙（1980）『中国訳日本書総合目録』では 958 種、田雁（2015）『漢訳日文図書総書目』では 1810 種とあると統計されている。本来、先行研究を踏まえながらその概観を把握しておきたいところであるが、これを別の機会にゆずり、本稿では、西師意（にし　もろもと, 1863－1936）という人物に注目し、主に下記のことを明らかにしたい。

その１：　翻訳者がどんな人物であるか？
その２：　数量的にはどれぐらいあるか？
その３：　内容的には如何なるものなのか？

譚汝謙（1980）、田雁（2015）などによると、西師意の手になる著作がかなりの数に上ることが分かる。

しかし、西師意自身については、実在していないとか、中国人の留学生であるとか、西洋の宣教師であるとか、幾種の臆説があるほど、今まで詳しく研究されていなかったのである。近年の研究で氏は日本人の翻訳者であることがわかってきたが [2]、それ以上詳細な研究はないように思われる。

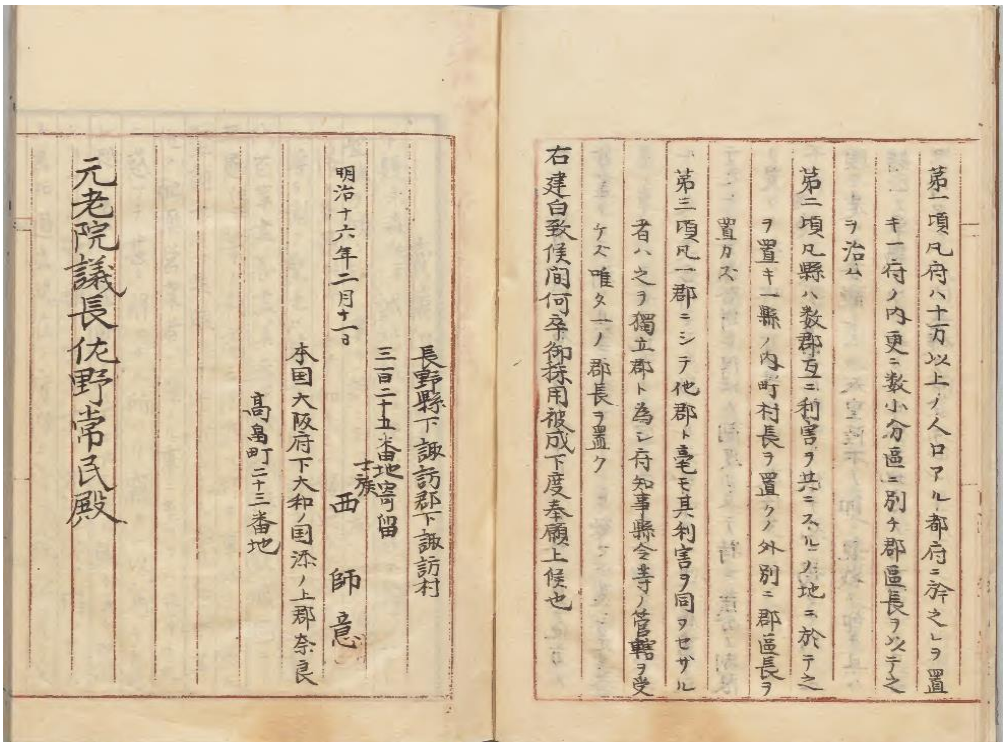
２．西師意の経歴

西師意は金城西師意、金城外史、金城子、西金城とも称する。1863 年の生まれで、1936 年（昭和 11 年）9 月 26 日に亡くなった [3]。 以下、氏の経歴について筆者が調査した範囲で若干整理しておく。（以下、下線は筆者による。）

２．１　幼少時代～温故義塾の時期

西師意の少年期に関する資料はまだ見つかっておらず、出身地なども不明である。明治 16 年（1883）２月 11 日に彼が元老院議長佐野常民宛に送付した「大阪府士族 [4] 西師意建白　地方区画改正ノ件外一件」という建白書によれば、氏は大阪府の士族出身で「<u>大阪府下大和ノ国添ノ上郡奈良高畠町二十三番地</u>」に本籍があり、「<u>長野県下諏訪郡下諏訪村三百二十五番地</u>寄留士族」として居住していたようである [5]。

西師意は当時の「官民ノ相調和セズ為メニ国事漸ク煩雑ヲ加ル」ことを慨嘆し、その原因の一つは「地方ノ分画其当ヲ得ザルニ依ル」地方官と人民との不調和であることを指摘した上で、郡や区の地方分画はその地方体の利害関係を考慮し且つその地方住民の意思をも聞くべきとして、「唯タ一通ノ届書ヲ以テ之ヲ分離合併シ得ル」ことはないように、後掲した画像にあるとおりの第一項から第三項の建言をしたのである。


第一項凡府八十万以上ノ人口アル都府ニ於ヒテハ置キ一府ノ内更ニ数小分區ニ別チ郡區長ヲ以テ之ヲ治ム

第二項凡縣ハ数郡互ニ利害ヲ共ニスル所地ニ於テハ之ヲ置キ一縣ノ内町村長ヲ置クノ外別ニ郡區長ヲ置カス

第三項凡一郡ニシテ他郡ト毫モ其利害ヲ同ヲセザル者ハ之ヲ獨立郡ト為シ府知事縣令等ノ管轄ヲ受ケス唯タ一ノ郡長ヲ置ク

右建白致候間何卒御採用被成下度奉願上候也

長野縣下諏訪郡下諏訪村
三百二十五番地寄留
士族 西師意

明治十六年二月十一日

本国大阪府下大和ノ国添ノ上郡奈良
高畠町三十三番地

元老院議長佐野常民殿

資料：西師意の建白書＜国立公文書館デジタルアーカイブ（DA）、行政文書・内閣・総理府・太政官・内閣関係・第一類・公文録・明治十六年・第百七十巻・公文附録（元老院二）https://www.digital.archives.go.jp/das/meta/M0000000000000152819＞

この建白書は、同年 7 月 9 日に元老院幹事黒田清綱の手を経て、太政大臣三条実美に呈上されたのである。そもそもなぜこの時期に斯様な地方区画の改正を建言したのか、また、その後の明治 21 年（1888）に施行された「市制町村制」(6) に、この建言が反映されたかどうかは本稿の取り扱う範囲外なので、深く立ち入らないことにする。ともかく、当時西師意まだ 19 歳で、若くして卓越な才能を有することが窺える。

今井卓爾（1936）では、牛山鶴堂が明治 15 年（1882）に近所の温故義塾で西師意について英語などの学問を学んだと述べている (7)。牛山は長野県諏訪郡下諏訪町の生まれだということで、上記建白書に示された西師意の住所と一致している。

２．２　名古屋へ転居と「国税税法改正案」の意見書（1886 年前後）

西師意が何時、長野県の温故義塾を離れたか今のところわからないが、遅くとも明治 19 年（1886）12 月にはもう名古屋に転居したらしい。

その時期に、彼は下記の意見書を出したことがある。（『伊藤博文文書　第 107 巻』

伊藤博文［著］，伊藤博文文書研究会 監修，檜山幸夫 総編集．ゆまに書房，2014.3 ）

1 国税税法改正案　明治十九年十二月十一日

2 税法改正案余言　明治十九年十二月廿六日

3 保護税論　明治十九年十二月二十日

ここでは、「国税税法改正案」に於いて、徴税は民力が之に耐えられるか否かによるべし、政府がその実情を十分に把握した上で行うことが望まれる、「酒造税」など製造段階の税収よりも「職業外物品使用税」（＝消費税）を徴収するのが良い、税目をなるべく少なめに整理し、「家屋税」（＝不動産税）などに集約して、収税検査の方法をも簡便にして、「良民ヲ保護シテ姦商ヲ鋤去スル」べき、などと建言していたのである。

署名は「名古屋矢場町一ノ切三十五番地[8]　西師意」となっている。

その後、1891 年 12 月出版の『治水論』の奥付に記載された「著者　京都府士族　西師意　京都府上京区小川通今出川上ル廿一番地」をみると、氏が京都にも一時期滞留したようである。その時期が恐らく名古屋より戻ってから富山に行くまでの間と思われる。或いはこの時期に同志社の教員になったのであろうか。

２．３　朝野新聞の記者から「北陸政論」の主筆、『治水論』（1890 年－1893 年）

西師意は後に明治 23 年（1890）11 月頃、朝野新聞の記者になった。朝野新聞は明治五年(1872）に創刊された新聞紙で、1890 年 11 月に経営難のため、大阪毎日新聞社長渡辺治に売却された。西師意はこの時期に入社したという。[9]

> その記者の主たる人々は渡辺治、川村惇、北村礼弼、西師意等の諸氏にて従来の尾崎、吉田、犬養等諸氏は全て之を去る由。[10]

> 「朝野新聞」略年譜
> 明治 23 年 11 月 28 日、「朝野新聞」譲渡、渡辺治が社長兼主筆に就任、北村礼弼、西師意入社、犬養・尾崎・吉田・町田等退社。[11]

明治 24 年（1891）4 月から富山の自由党系機関紙「北陸政論」の主筆となった。稲垣示（1849-1902）が党首の北陸自由党の政党員にもなっていた。

西師意は明治 24 年 12 月、富山の清明堂から『治水論』という本を出して、当時のデ・レーケ[12] の指導による常願寺川の改修工事に対して批判していた。これは、1891(明治 24)年 8 月 1 日 から 10 月 7 日まで連載した記事を、同年 12 月に富山市の清明堂から出版した図書である。 この書の序文には、国会議員の井上角五郎、湯本義憲及び北陸由党代表の稲垣示が推薦文を贈っており、内容は総論、森林、河身改修、治水費、結論の 5 編からなっている。詳しくは甲斐原一郎 (1957) [13]、市川紀一 (2005)

などの研究を参照されたい。[14]

「北陸政論」に載せた一連の改修工事に対する批判記事は、単なる技術論争ではなく、北陸自由党の党勢拡大と行政側への批判、それに県民への治水への関心を高揚するために掲載されたことを指摘できる[15]。

この治水論争で、西師意は一時、その名を世に知られるようになった。ここで甲斐氏の論文に記述された西師意の「北陸政論」の主筆時期の状況を引用しておく。(以下、引用文における字体などは一部、現在の通用の字体に直している。)

> 著者西師意の人物については，不明な点が多く，栗原東洋氏の考証もつぎの点にとどまっている。西は「北陸政論」の主筆で，「当時の操觚界における卓抜な学識高見は躍如として，北陸政論の論壇に現われた治水論，地方自論，北海道の将来，政党療治策，情実政治家根治策，伏木築港論等は有名なもので，何れも 20 回ないし 30 回にわたる長論文であった。就中治水論，伏木築港論の如きは重要資料として尊重されたものであった（富山県政史第 5 巻 607 頁）という。
>
> 北陸政論はもと自由党系の政治家によって創始されたもので，その発端は明治 21 年 12 月， 後藤象二郎が大同団結を主張するため来県してからで，これが動機となって機関新聞の発行を見た。 「北陸公論」がそれで，第 1 号は翌 22 年の 4 月 5 日， 23 年 9 月 14 日第 433 号を最後として廃刊。同 18 日「北陸政論」にかわった。そのとき社長は稲垣示から南磯一郎にかわり，同時に主筆も永問一二から吉田正春に移った。その後吉田は逓信書記官となり，その後をうけて 24 年 4 月西師意が主筆となったのである。彼の主筆就任の時期は，丁度常願寺川の大水害の直前，あるいはそのさなかであった。また御傭技師の蘭人デレーケが，常願寺川改修を西欧技術方式で計画していた時期でもあった。
>
> 西は来社後間もなく，治水に関する論稿を連載し，その年の 12 月にまとめあげて公刊したのが，ここに紹介する治水論である。また彼は新聞記者として，再三再四デレーケと会談し，デレーケの治水構想をたたいてもいる。
>
> しかし西の北陸政論主筆時代はきわめて短かった。原因は明らかでないが， 26 年 2 月頃，社内に紛争がおこり，西主筆と小塚編集長との間で対立，改革，非改革の両派に分れではげしく争った。非改革派の西は結局屈伏，社長らとともに辞任した。おそらく経営，財政問題であろうが，26 年 2 月のことだから，西の北陸政論主筆時代は僅かに 2 年足らずに過まなかったわけである。

とすれば、西師意の富山生活は、朝野新聞の記者歴と一部時期重なっているように見える。明治 24 年（1891）4 月 7 日から 23 日までの『朝野新聞』トップページに 15 回にわたって、西師意の執筆による「治水論」の記事が掲載されていた。[16] 上記甲斐

原一郎（1957）の記述をみると、この「治水論」は『北陸政論』にも載せられた様である。

ちなみに、西師意の富山での住所は、明治 26 年 1 月 10 日上梓された『伏木築港論』の奥付によれば、「富山市総曲輪四十三番地」となっていた。

２．４　『時事新報』記者の時期（1898？～1901？）

明治 26 年 2 月以降から明治 31 年初めまでの間、西師意はどこに籍を置いたのかは不明である。

明治 31 年(1898 年)3 月に創刊された『慶應義塾學報』[17] の第三号（1898 年 5 月）に掲載された塾報に、「楠本武俊氏は日本郵船会社の孟買支店に各赴任せんとするを以て四月五日午後六時より芝公園紅葉館に於て其送別会を開きたり」という記事がある。そこでは、送別会の出席者に「福沢先生を初めとして学者、教員、会社員、新聞記者等凡そ百三十余名」とあり、西師意の名も連ねられている。

また、同学報の第五号（1898 年 7 月）の塾報には下記のような一報もある。

● 西師意氏　数月前時事新報特派員として軍艦秋津州に陪乗しマニラへ戦争視察に赴きたる同氏は已に去月中帰京したり

同誌には、西師意が書いた「フィリピン群島の処分」という記事が載せてある。つまり、遅くとも 1898 年初には、西師意が既に上京して時事新報 [18] の記者として勤めていたことになる。

更に、『慶應義塾學報』第十一号（1899 年 1 月）の塾報の「東京に於ける慶応義塾同窓会」という記事にも、西師意の名前が見える。福沢諭吉の誕生日 12 月 12 日を期して芝公園紅葉館に開かれたものである。西師意がかつて慶応義塾の塾生であったことは間違いない。

当時、西師意は時事新報の記者の傍ら、なぜか数学の研究にも熱心のようであった。小冊子ながら二種の英文による数学書『Multi-Homogeneous Theorem』(1899 年 10 月）と『Combinational combinations』(1900 年 1 月）を著した。東京都麻布区谷町四十番地 [19] に住んでいた頃である。

２．５　大阪毎日新聞記者の時期及び中国への渡航（1901－1902）

1901 年 5 月～1902 年頃、西師意が大阪毎日新聞記者として中国に渡航して北京など各地で活動した。

明治 34 年（1901 年）5 月 9 日に発行の『慶應義塾學報』第四十号の「動静」欄に、下記の消息が載せてある。

〇西師意氏　久しく時事新報編輯局に勤務せられし氏はこの程大阪毎日新聞北京通信員に転勤せりと

また、西師意が『二十年前の回顧：日英同盟の効力』（1921 年単行本として出版、1927 年出版の『二十年後の太平洋：くにのはしらたてなほし』にも収録）の第一章「泰東之休戚（漢文）」の緒言において、次のように述べている。

> 此一篇は、明治三十五年二月中、金城子、北京に在りて、日英同盟条約の発表に逢ひ、一は清国当路の疑惑を釈き、一は清朝の傾覆を救わんが為め、呵筆二日にして脱稿したるもの、当時、清廷第一の忠人なる将軍馬玉昆の如き、此篇を一読し、自ら其疑団の氷釈したるを喜び、特に人を介して、其歓を陳べ越さしめたることあり。
> 備考　日英同盟の発表は、明治三十五年二月（陽暦）中旬、北京の日本公使[20]館に於て、之を聞き、「泰東之休戚」なる小冊子は、支那木版に託して、其陰暦二月五日に発行せられたり。

これは前記の異動消息の裏づけになる。1902 年２月頃には西師意が中国に渡航していたのである。この事実は、『慶應義塾學報』第五十号（1902 年 3 月 15 日）の「塾報」の記事によっても裏づけられる。同誌に「北京の福沢先生追悼会」なる一文があり、西師意について次のように言及されている。

> 去月三日同地在留の門下生相計り福沢先生追悼の意を表する為め午前十時池田氏邸に集り、＜中略＞、出席の同窓有志は左の数名に過ぎざるも、語次先生の旧に及べば、何れも襟を正して往事を追懐せざるものなく、云々。
> 工藤精一、西師意、池田常太郎、大井政次郎、上田三条、松島宗衛、
> 木村竹南、寺崎辰男、三島真吾

更に、別の資料から西師意の今回の渡航目的を知ることができた。即ち、国立公文書館アジア歴史資料センターの公開資料である「明治三十四年八月八日　高砂便乗者報告」（【付録一】を参照）によると、彼は明治 34 年（1901）8 月中に、大阪毎日新聞社の記者として日本海軍の高砂艦（防護巡洋艦）に「山海関ヨリ芝罘[21]迄」乗り合っていたことが分かる。つまり、その当時、西師意は既に中国で新聞記者として活動していた。

なお、1901～1902 年間に出版された 4 種の氏の漢文書籍（金城叢書）は、華北訳書

局[22]から刊行されており、当訳書局と何らかの関わりがあったのではないかと推測できる。華北訳書局は清末の大儒呉汝綸[23]が弟子の常堉璋、邓毓怡に命じて営ませた訳書機構であり、『経済叢編』を発行し、多数の訳書を出版したという。[24]

西師意が緒言で言及した馬玉昆（？－1908 年）は、甲午戦争に於いて、唯一日本軍に善戦した清の将領であり、1902 年当時は太子少保の高い地位にあり西太后や光緒帝に最も信頼された大臣の一人である。「泰東之休戚」なる一文は彼の目に留まるほどの内容なので、これを書いた西師意も当時の北京上流社会に名を知られていたように思われる。

西師意が北京上流階級と如何なる接点があったのか、詳しくは今後の研究に期したいが、一つ手がかりになるのは、明治 36 年（1903）2 月 7 日に出版された氏の『官民衝突之急調』の奥付に掲載された上述の４種の漢文書籍の広告である[25]。次に示す。

清国大儒　呉汝綸先生序並評／金城　西師意先生著
◎史眼（古意新情）
清国大儒　呉汝綸先生序／金城　西師意先生著
◎実学指針（文華之光）
金城　西師意先生著
◎泰東之休戚（日英聯盟解）
清国名士　常堉璋先生序／金城　西師意先生著
◎大学義疏（温故知新）

西先生大阪毎日新聞の為に筆を載せて清国に遊び業務の傍ら兼ねて華北訳書局の事に従ひ書を著すこと数種、精緻該博の説、達観深察の論、風起り雲湧き龍踊り虎嘯く殊に其文章の絢爛なる盤上玉を転じ鏡裏花映すの妙あり宜なる哉、先生の書一たび出でて能文の名、高識の誉嘖々として北京文壇の間に喧傳せられ洛陽の紙価をして為に昂からしむ、議論均能独具隻眼、別出心裁、其援古証今処、尤徼卓識、能見前人所未見、言前人所未言は溥左都御使の評する所、議多英偉は呉摯甫先生の言にして、著書以救吾国学術之弊……一以泰西新学之理参解之、吾国自来経師未嘗有也は常氏の言なり以て、先生の書が如何にその価値あるかを見る可く又如何に支那の人文に資するの大なるかを知るべし、今この四篇は既に公刊に属するもの志学慨世の士読まざる可らず。

（資料：実藤文庫所蔵『金城叢書』関係[26]の表紙――※画像の掲載は東京都立中央図書館の許可を得ており、画像の無断複製や二次使用を禁ずる。）

東京都立中央図書館所蔵の「実藤文庫」のコレクションに上記書物がある。ここで、その序文などを書き写しておく。

（実藤文庫 444、『大日本金城叢書三種　安論危辯』所収）
◎史眼（古意新情）の序文
蓮池書院山長呉摯甫先生、謙徳太過、特書訓言於篇尾、而金城子不敢能従命、乃載之於巻首。

金城先生為書十章、名之曰古意新情。凡所以激励吾国者至深切、其云八股文雖廃而人心之八股不易改、何其言之湛至而警絶也。国家新挫於兵、掃地赤立。先生所決策、期之百年不倦。此非法之難行、抑亦行法之難其人也。岳瀆英霊、儻猶不遽歇絶乎、当必有起而荷負鉅難。得先生之言而力而見之行事者、雖国恥未遽雪、其於救之振敗或庶幾焉。斯則衰朽小儒所延跂而祷求者已。
辛丑十月皇清退士　呉汝綸　跋

◎実学指針（文華之光）
是書詳記英俄徳美之地積人口財政軍政、使吾国士夫考隣敵之富強而思所以自振、

其用意故以懃懇矣。至称述閣龍牛菫芙蘭克林華徳之徒、諷切微至。吾曹従事学業者、其媿励感奮宜如何也。天下治乱、匹夫与有責焉。種火於積薪之下、而怪寝其上者之不能焦毛髪灼肌膚以救焚、不其惑歟。周公多才芸孔子多能、夫是以兼夷狄駆猛獣、我戦則克。斯吾儒之所謂聖也遼乎邈哉。
光緒壬寅二月呉汝綸記

『大学義疏』(実藤文庫 348)[27]

大学義疏序
世界之文明、歴世而益進。是故近世之新学、不必為古昔聖賢経伝所已言、然其理固無不通也、惟学者能以新理読古書、乃足以見古書之餉遺世人広大而靡尽。雖然吾国六経、既汨於漢儒訓古之繁瑣、宋儒出更易以深阻逼隘之説、而挙世崇奉、無敢更置一辞。此其於六経本旨、未知其何如。要適為宋儒之書、而非古昔聖賢之書無疑也。奉宋儒深阻逼隘之説、而以為周孔大道即在於是、此吾国学術所以日蹙而不進歟。日本西君師意、嘗致力吾国聖賢之書、而又博通新学、居吾国久、嘗著書以救吾国学術之弊、顧以為未愜、乃更著大学義疏一編、挙朱子所謂三綱八目者、一以泰西新学之理参解之、吾国自来経師未嘗有也。学者苟因端而竟其緒、則東西先覚、古今理論、皆可一以貫之。而吾道将日宏、学術之文明且日進而不已也。壬寅三月饒陽常堉璋識。

下線部で言われた西洋の新しい知識をも援用して『大学』の注釈を施しているものの例として、次のような箇所が挙げられる。

◎格物
疏
耳之於声音、目之於形色、口之於味、凡有所惑、必有所覚。皮膚触於物、或覚其硬軟、或覚其冷熱。而手指尖頭、其感覚再鋭敏者、以神経密集於此之故也。
耳目口鼻、各具特種機関、通神経以接於脳。分之偏用其一官、則其感僅作直覚。合之集用其諸覚、則其総合反照、漸作良知。＜中略＞直覚莫明於視覚。視覚自為五覚之師、其用亦確実矣。故曰、百聞不如一見。
◎致知
疏
脳者。諸覚諸萃、諸覚諧合而知自身焉

西洋の新知識である生理学における脳の神経や感覚器官などによって、はじめて

「格物致知」することができる、と述べている。
呉汝綸は『史眼』に序文を寄せただけでなく、本文の各章ごとに評語も下している。また、『史眼』の巻末に附した西師意の漢文詩歌にも「有雄儁之気」と評している。

曩日金城子見山海関形勢
　　偶感
楡関曙色接長城　朔馬嘶風漢帝驚
四百余州兵気耗　秦皇嶋下龍虎争
　　呉摯甫先生評　　有雄儁之気
　　呉[焱の下に木]甫先生評　　雄濶

上記諸氏のほかに、溥左都御使[28]も西師意の著書を高く評価しているところを見ると、西師意はこれらの人物と付き合いがあったろうと推察できる。そして、彼が大阪毎日新聞の記者の仕事を全うする傍ら、華北訳書局の翻訳事業を手助けしていたことも上記の広告文で分かる。
呉汝綸は晩年、蓮池書院に於いて英文と東文（日本語）学堂を開いたりして、西洋文化や教育に関心を寄せ、古い科挙制度を廃止し、西洋の新しい学校教育制度を導入すべきと唱えていた[29]。故に西師意が言う「八股文雖廃而人心之八股不易改」、つまり、八股文が廃止されても人々の固執観念が変え難いという意見に共感したのだろう。呉汝綸は1902年に京師大学堂の総教習になり、同年6～10月に、教育及び学校制度を考察するため日本に出張していた。その間に慶応義塾をも参観しているが（後述）、そのきっかけになったのは北京滞在中の西師意との付き合いによるものではないかと思われる。

２．６　慶応義塾普通部教師時期（1902年-1903年9月頃）

前述した『官民衝突之急調』（1903年2月出版）の奥付に示された西師意の住所が「東京市麻布区谷間四十番地」となっていることから察すると、北京で大阪毎日新聞記者として一年ほど滞在した後に、1902年中に一旦帰国して1903年9月頃まで、彼は東京に居住している。その間、慶応義塾の教授の職に就いたらしい。
『慶応義塾学報』第五十七号（1902年10月）の「塾報」にある「義塾教師動静」という記事には、「又前大阪毎日新聞社北京通信員たりし西師意氏は補修科数学教授と担当せり」とある。
その間、1902年10月10日に呉汝綸氏が慶応義塾を見学に来た[30]。これに関する記事は、同じ『慶応義塾学報』第五十七号の「塾報」に載せてある。

○呉汝綸氏の義塾参観

清国京師大学堂総教習呉汝綸氏は翰林官厳修、通弁張奎、黎淵の諸氏と共に一昨十日午前十時芝三田なる慶応義塾に赴き参観を求めたり、呉氏は帰国の後其郷里安徽省に於て厳氏は天津に於て各私立学校を創立するの希望を有するよしにて、日本に於ける私立学校の泰斗たる慶応義塾の事は特に詳細に承知したるしとの希望に依り、塾長教頭等の案内にて先づ大学部授業の模様を見、次に幼稚舎に赴きて其教場寄宿舎より生徒の体操を一覧し、更に普通部の各教場を巡視し了りたる時は早や既に十二時にして、大広間に於て昼飯の饗応を受け、暫時義塾の組織等に就て談話したる後、更に演説館、寄宿館、学生倶楽部等を巡覧し了て更に大広間に会し茶を喫しながら義塾の来歴、其組織その維持法並に福澤先生の事等に就て種々質問し、義塾が過去四十五年間に二万の学生を養ひ現在二千有余の生徒を教育するに、未だ曾て一銭たりとも政府の補助を受けざる事、創立以来社会の変乱に遭遇しながら独立独行一日も其業を廃せず始終一貫以て今日に至りしことなど談話せしときは、何れも深く感じたるものの如しと言ふ、斯して呉氏は近日帰国に付き再会期し難きも、厳氏は尚ほ暫く滞在する筈なれば、重ねて参観を乞ふこともあるべしとて、只管義塾の好意を謝し四時頃辞し去りし由。

上記を見る限り、呉汝綸一行の見学はかなり充実した内容である。そのため、当日西師意と会って話をする時間的余裕があったどうか不明であるが、西氏がそれから一年も立たないうちに辞職して中国へ行くことを決意したのは、偶然とは思えない。

２．７　山西大学堂訳書院における翻訳活動（1903 年 9 月頃～1908 年？）

山西大学堂は 1902 年に山西省の巡撫の岑春煊（1861-1933）とイギリス人宣教師のティモシー・リチャード（Timothy Richard、中国名：李提摩太、1845-1919）が共同で創立した、西洋式教育制度を取り入れた新しい学校である。中国で最初の三つの国立大学堂の一つで、北洋大学堂（後の天津大学）と京師大学堂（後の北京大学）とともに近代中国高等教育の先駆けである。

ティモシー・リチャードは、イギリス浸礼教宣教師として 1870 年から 1915 年にかけて中国に滞在し、当時中国の政治思想界と深く関わった人物である。[31] 飢饉救護活動、広学会の主宰、 山西大学の設立、高官との交遊など、多彩な活動を行い、梁啓超（1873-1929）や康有爲（1858- 1927）らの改革論にも多大な影響を与えた。

1898 年の「百日維新」と 1900 年の「義和団運動」以降、清王朝はその専制統治を維持するため、国内外の各種の圧力に迫られ、1901 年（光緒 27 年）にいわゆる「新政」を実行すると宣言し、学校を設立して教育改革などを行おうとした。同年、清政府は勅令を布達し、京師大学堂を除き、各省のすべての書院が省城で大学堂に改築さ

れ、各府庁直隷州には中学堂が設置され、各州県には小学堂が設置されるようになった。当時、山西省太原には「晋陽書院」と「令徳堂」の二つの書院があり、「百日維新」期間中、「令徳堂」は山西省会堂に変更され、一定の改革が施行された。その上で、1902年の初めに、山西巡撫岑春煊は朝廷の訓示に従い、「令徳堂」を山西大学堂に変更させた。山西候补道姚文棟を初代監督（校長に相当）に任命し、高燮曾を総教習、谷如墉を副総教習として、太原文瀛湖南郷試貢院を臨時の所在地として、晋陽書院と令徳堂の学生を受け入れて、正式に山西大学堂をスタートさせた。

1904年に新しく着任した提学使宝熙は、山西大学堂の学制改正を実施し、特に課程の設置に対して大きな改革を行った。高等科を文、理の二科に分け、古い科目では「経学」という一科目しか保留しておらず、ほかは全部無くして、その代わりに英語、日本語、フランス語、ロシア語、代数、幾何、物理、化学、地理、歴史、生物、絵画、音楽と体操などの新しい授業を増設した。[32]

教師陣には傅岳（西洋史）、張友桐（中国史）、任翊銮（地理）、楊培根、王垂純、祁崇仁、呉渭濱、任鐘澍等が居た。[33] 日本人の教員に小金亀次郎、剛田定次郎が居た。また、1904年から1905年まで優秀な学生を40人選んで日本に留学させた。

ティモシー・リチャードはまた、ほぼ同時に山西大学堂翻訳書院をも設立した。初めは上海西華徳路に設けて、後に江西路の福慧里210号に移った。訳書院は最初、李曼教授が主宰し、その後、英国人の窦楽安博士(John Dorroch)が主宰となった。ティモシー・リチャードがその回想録の中で、彼自身が1903年5月に日本に赴き、山西大学堂のために教材を探し、日本人及び中国人を招いてその翻訳に従事させようとしていた、と述べている。[34] 英語の原文は次の通りである。

> In May 1903 I paid a short visit to Japan for the purpose of securing suitable textbooks for the Shansi University, and to engage a Japanese and Chinese scholar for their translation. (pp318-319) [35]

西師意もこの時に招かれたのだろうと言われているが[36]、むしろ、前記した呉汝綸一行の訪日がそのきっかけになったかと思われる。『慶応義塾学報』第六十九号（1903年9月）の「動静」に、下記の一記事が載せられている。

> ○西師意氏　は義塾普通部教師を辞せしが近日渡清の上支那時文翻訳事業（日本及泰西の教科書を支那時文に翻訳する事）に従事するよし

前記の呉汝綸氏の義塾来訪から一年足らずでのことである。これまで考察してきた通り、西師意は大阪→長野→名古屋→京都→富山→東京→中国北京→東京など各地へ

転々とする。決して順調ではなかった40年間ほどを経て、ようやく恩師の創立した慶応義塾の教授になったのであるが、一年も経たないうちに、それを辞めてしまうのは相当な決意があったかと思われる。

山西大学堂翻訳書院に、英語、日本語の翻訳者及び校閲者は前後、あわせて10人余り在籍していた。夏曽祐（江西銭塘）、許家惺（浙江上虞）、朱葆琛（山東高密）ら、当時の翻訳業界の俊材を含め、張在新（上海）、范熙沢（上海）、黄鼎（湖北同安）、梁瀾勲（広東三水）、許家慶（浙江上虞）、葉青（上海呉県）、郭鳳蓮（山東省）、蘇本銚（上海）などが居た、西師意もその中の一員であった。

彼は主に日本語の教科書の翻訳に従事した。1902年の成立から経費不足で閉鎖となった1908年までの6年間に、山西大学堂訳書院が翻訳した本は23〜25種類と言われている。西師意が主な訳者の一人であり、その貢献度が非常に大きい。下記は、当時彼が直接翻訳に関わった教科書である。

『藤泽算術教科書』二册,（日）藤泽利喜太郎著；（日）西師意訳。1904年
『应用教授学』一册,（日）神保小虎著；（日）西師意訳述。1905年
『植物学教科書』一册,（日）大渡忠太郎著；（日）西師意, 許家惺訳述。1905年
『矿物学教科書』一册,（日）神保小虎著；（日）西師意, 許家惺訳述。1905年
『物理学教科書』一册,（日）渡辺光次編；（日）西師意, 許葆琛訳述。1905年
『地文学教科書』一册,（日）横山又次郎著；（日）西師意訳。1907年
『代数学教科書』二册,（日）西師意訳、1907年
『動物学教科書』一册,（日）丘浅治郎著；（日）西師意, 許家惺訳述。1911年

日本語から転訳された教材の一部は、日本博文館印刷所（東京日本橋区本町三町目）または福音印刷合弁会社（横浜市山下町八十一番地）で製版刊行された。

ところで、後述の西師意の著作リスト一覧表を見ると、その中国訳日本書は主として、山西大学堂訳書院と東亜公司から刊行されていた。特に、1906年以降は東亜公司のほうが圧倒的に多い。あるいはその年から、西師意が東亜公司に移ったのであろうか。

汪家熔（2008）では西師意が1907－1909年の間に日本に於いて『農学叢書』8種を翻訳したと述べているが、「日本に於いて」の根拠を示していない。西師意についても不確かの意味を示す“西師意”で表わしている[37]。また、後述（第3節）の通り、西師意が訳した『農学叢書』は実際、12篇に上っている。

金康彪（2004）では、下記のような記述がある（下線は筆者による）。

また、中国の留学も急増する気運に乗って、日本の三省堂では株式会社東亜公

司を創設し、編集所内に東亜公司編集室を設け、牧野謙二朗、古城貞吉らを招聘し、また中国から碩学呉汝綸が来日した際に、彼の意見も求めた。書物の翻訳には、東亜公司編纂局、西師意（日本人）、王挺幹等が担当していた。中国国内では1897 年に設立した商務印書館は 1903 年には日本の金港堂と合作することになって高等師範学校校長兼文部委員の経験がある伊澤修二が商務印書館の顧問を担当していた。例えば『最新算術教科書』（東野 十治朗 著、西 師意 訳、東京三省堂 1906）、『幾何学教科書』（生駒万治講述、金太仁作訳、東京東亜公司、1909）等の 数学教科書は日本人が直接或いは間接的に関わっていた。[38]

但し、『三省堂の百年』の当該箇所（ｐｐ59-61） を確認すると、西師意の名前は出てこない。西師意と東亞公司がどういう関係であったのか、今のところ直接的な証拠はないままである。

そして、『慶応義塾学報』について第六十九号（1903 年 9 月）から 1909 年 2 月までの「塾報」や「動静」などを一通り検索してみたが、西師意が義塾普通部教師を辞めて以来、『慶応義塾学報』からは消息が絶えたようである。また、1903 年 2 月の福沢諭吉の三周年忌の参列を最後に、その後の周年忌にも姿を見せなくなったようである。日本に戻ってからも 10 年ぐらい本を出しておらず、再び本を書き出したのは、1921 年の『二十年前の回顧 ： 日英同盟の効力』からであった。その間、西師意に一体何があったのであろうか。

２．８　京都中学校における活動

１９０８年に山西大学堂訳書院が閉鎖された後、西師意は帰国したと思われるが、具体的な時期は明らかになっていない。

そして、彼は 1908 年 11 月に私立京都中学の校主兼校長になり、1936 年（昭和 11 年）9 月 26 日に亡くなるまで、主として学校教育に携わっていたようである。後年、日本弘道会の会員にもなったらしい。

但し、学校創立の経緯などについては不明である。西師意は教育の傍ら多数の著書を残していた。私立京都中学と西師意が関わる略年表を示せば次の通りである。[39]

年	月	日	
明治39	4	1	京都市上京区岡崎町日蓮檀林校舎を利用し府知事より私立京都中学として認可される。
明治39	4	14	文部大臣より中学校舎による私立中学校として認可。 初代校長　大橋　十右衛門　生徒定員　300 名

明治41	11		西　師意（ニシ　モロモト）校主兼校長に就任
大正7	5		生徒定員　400名認可
大正8	8		校名を京都中学校と改称認可
大正9	4		校長　岩城　良太郎
大正10	9		生徒定員　450名認可
昭和5	6		校長　西村　力
昭和9	6		校長　池松　時和
昭和10	10		校長　中江　源
昭和11	9	26	校主　西　師意死去

３．　西師意の中国語訳日本書

従来、西師意の中国語訳日本書については殆んど研究されてこなかった。筆者は、主に以下の資料に基づいて西師意の著作を統計してみた（表１）。

①田雁 2015『漢訳日文図書総目』第一巻（1719－1949.9）、社会科学文献出版社

②国立国会図書館デジタルコレクション（表では degidepo と備考欄に示す）。

③https://ci.nii.ac.jp/books/

表１　西　師意（1863-1936）の著作リスト

	年次	言語	著書名	書誌	備考
1	1891	日	治水論	西師意 著（清明堂, 1891）	degidepo
2	1893	日	経国大策百年之安危	西師意 著（西師意, 1893）	degidepo
3	1893	日	伏木築港論	西師意 著（北陸政論社, 1893）	degidepo
4	1899	英語	Multi-Homogeneous Theorem	西師意 著（天香書院, 1899）　洋装美本	degidepo
5	1900	英語	Combinational combinations	by Moromoto Nishi(Printed by the Kokubunsha, 1900)	degidepo
6	1901	中	史眼十章	（日）西師意　撰;李茂堂　刻印(出版者不明, 1901年)	田雁 0212
7	1901	中	史眼（古意新情）	（日）西師意　著;訓練総監部編訳;（南京　軍用図書社,　1901年？）	田雁 1695、『官民衝突之急調』の奥付

8	1902	中	実学指針ーー文華之光	（日） 西師意　著;訓練総監部訂;（北京　華北訳書局刻本, 1902 年）	田雁 0211,
9	1902	中	泰東之休戚	（(日) 西師意 (金城) 著;（北京　華北訳書局, 1902 年	実藤文庫 0475
10	1902	中	大学義疏ーー温故知新	（日） 西師意　著;訓練総監部訂;（北京　華北訳書局, 1902 年）	田雁 0258
11	1902	中	史眼・実学指針・泰東之休戚	（日）西師意（金城）著;（北京　華北訳書局, 1902 年）	田雁 0358
12	1903	日	新代数学（全三冊）	西師意 著（天香書院, 1903） 菊判洋装	『官民衝突之急調』の奥付★
13	1903	日	三版増補　日本文明史	西師意 著（天香書院, 1903） 菊判洋装	『官民衝突之急調』の奥付★
14	1903	日	官民衝突の急調 ： 議院政治の将来	西師意 著（天香書院, 1903）	degidepo
15	1904	中	算術教科書	（日）藤沢原　著;（日）西師意　訳述;（太原　山西大学堂訳書院, 1904 年 9 月初版）	田雁 0821、北京国家図書館
16	1905	中	地文学教科書	（日）横山又次郎　著;（日）西師意訳述;（太原　山西大学堂訳書院, 1905）	田雁 0859、北京国家図書館
17	1905	中	地文学教科書	（英）窦楽安著;（日）西師意訳;（上海協和書局, 1905 年）	田雁 0860
18	1905	中	鉱物学教科書	（日）神保小虎　著;（日）西師意訳述;許家惺　校;（太原　山西大学堂訳書院, 1905）	田雁 0888
19	1905	中	物理学教科書	（日）渡辺光次　編;（日）西師意訳;（太原　山西大学堂訳書院, 1905）	田雁 0924、北京国家図書館

20	1905	中	応用教授学	（日）神保小虎　著;（日）西師意訳;（太原　山西大学堂訳書院, 1905年）	田雁 0945
21	1905	中	植物学教科書	（日）大渡忠太郎　著;（日）西師意訳;（太原　山西大学堂訳書院, 1905年）	田雁 0952、北京国家図書館
22	1906	中	農業汎論	（農学叢書 ； 第 1 編） / 横井時敬著[他]（東亜公司, 1906）	degidepo; 田雁 1161（1907 年）
23	1906	中	耕種原論	（農学叢書 ； 第 2 編） / 沢村真 著[他]（東亜公司, 1906）	degidepo; 田雁 1126（1907）
24	1906	中	栽培通論	（農学叢書 ； 第 3 編） / 稲垣乙丙著[他]（東亜公司, 1906）	degidepo
25	1906	中	栽培各論	（農学叢書 ； 第 4 編） / 佐々木祐太郎 著[他]（東亜公司, 1906）	degidepo
26	1906	中	園芸要論	（農学叢書 ； 第 5 編） / 池田伴親著[他]（東亜公司, 1906）	degidepo; 田雁 1313（1908 年再版）
27	1906	中	最新算数教科書	宏文学院教授　東野十二郎著/西師意　訳（東亜公司,　1906 年前？）	体操全書の奥付
28	1906	中	電気学　全一冊	理学士萩原拳吉 著/西師意　訳（東亜公司, 1906 前？）	体操全書の奥付
29	1906	中	体操全書	可児徳 著[他]（東亜公司[ほか], 1906）	degidepo
30	1907	中	最新動物学講義	飯島魁 著[他]（東亜公司[ほか], 1907）	degidepo
31	1907	中	家畜飼養汎論	（農学叢書 ； 第 6 編） / 八鍬儀七郎,　石崎芳吉 著/西師意　訳（東亜公司, 1907）	degidepo; 田雁 1344（1909 年）
32	1907	中	家畜飼養各論	（農学叢書 ； 第 7 編） / 八鍬儀七郎,　石崎芳吉 著/西師意　訳（東亜	degidepo; 田雁 1345

				公司, 1907)	(1909 年)
33	1907	中	最新電気学	理学士萩原拳吉 著/工学博士五十嵐秀助 校訂/西師意 訳 (東亜公司, 1907)	degidepo
34	1907	中	日本欧美教育制度及方法全書 ： 学校管理法・教授法・各科性質・各科互交之関繋	小泉又一 述[他] (東亜公司[ほか], 1907)	degidepo
35	1907	中	代数学教科書	(日) 渡辺光次 著;(日) 西師意訳;(上海協和書局, 1907;太原山西大学堂訳書院, 1907)	田雁 1110
36	1907	中	代数学教科書	(英) 窦楽安著;(日) 西師意訳;(上海協和書局, 1907)	田雁 1112
37	1909	中	病虫害学	(農学叢書 ; 第８編) / 農学士外山先生 著/西師意 訳 (東亜公司, 1909 年前？)	★
38	1909	中	養蚕論. 上下二冊	(農学叢書 ; 第 9 編) / 農学博士佐々木先生著/西師意 訳(東亜公司, 1909)	degidepo; 田雁 1374
39	1909	中	林学要論	(農学叢書 ; 第 11 編) / 本多静六著[他] (東亜公司, 1909)	degidepo
40	1909	中	獣医学	(農学叢書 第 12 編;) / 農学士小倉先生 著/西師意 訳 (東亜公司, 1909？)	★
41	1910	中	農業経済論	(農学叢書 ; 第 10 編) / 横井時敬著[他] (東亜公司, 1910)	degidepo ※
42	1911	中	動物学教科書	(日)丘浅治郎 著;(日)西師意訳;(上海 広学会, 1911 年, 122 頁)	田雁 1461
43	1911	中	鉱物学 (一巻)	(日)神保小虎;(日)西師意 合著;許家惺 訳(太原 山西大学堂訳書	田雁 1557

				院, 1911 年前？)	
44	1911	中	動物学（一巻）	（日）大渡忠太郎　著；　許家惺訳；(太原　山西大学堂訳書院, 1911 年前？)	田雁 1462
45	1921	日	二十年前の回顧 ： 日英同盟の効力	西師意 著（京都中学校, 1921）	degidepo
46	1921	日	当面の太平洋問題 ： 一名・和戦同衡論	西師意 著（京都中学校, 1921）	degidepo
47	1924	日	地震の研究	西師意 著（京都中学校, 1924）	degidepo
48	1924	日	地球の研究 ： 附・地震ノ原因旱魃ノ原因	西師意 著（京都中学校, 1924）	degidepo
49	1925	日	百日百題天籟のさけび ： 時勢大観	西師意 著（京都中学校, 1925）	degidepo
50	1927	日	二十年後の太平洋 ： くにのはしらたてなほし / 金城外史著	金城外史 著（京都中学校, 1927）	degidepo
51	1928	中	金城先生經訓緯誨	西師意著（京都中学校, 1928、1930）	Cinii Books
52	1930	日	国難来	金城外史 著（京都中学校, 1930）	degidepo
53	？？	中	気象学	（日）馬場信論　著；(日）西師意訳述；)	肖朗, 吴涛 2014
54	？？	中	生理学教科書	（日）丘浅治郎　著；許家惺、(日）西師意　訳；)	肖朗, 吴涛 2014

※：53-54 番は??出典の出所不明で、所在も判明できないものであるが、一応参考として記しておく。

西師意の中国語訳日本書の内容自体について言及したのは管見の限り、今まで僅か朱京偉（2002）一論文[40]しかない。2002 年当時の研究環境は未整備で、研究資料の入手が今よりずいぶん困難な状況であった。そのため、若干の誤りは散見されるのではあるが、今日に至っても当該論文は特筆すべきものである。清末期の中国語訳日本書を丹念に調べ、近代訳語の成立過程及びそのメカニズムを解析しようという朱京偉氏の試みは一つの方法を示している。

但し、本稿も西師意の中国語訳日本書の内容自体について触れるには至らなかったため、今後の課題としたい。

４．　まとめ

本稿では、近代日中言語交渉史に於いて従来殆んど注目されなかった西師意について、その経歴を、断片的ではあるが、ある程度明らかにした。ここで要約しておく。

氏は 1863 年に生まれ、大阪府士族出身で、慶応義塾に学び、２０歳前後に長野県諏訪郡の温故義塾に教鞭をとり（1882 年前後）、若くして卓越才能を有し、漢学及び英語が堪能であった。

その後、名古屋や京都を転々として（1886 年前後）、朝野新聞の記者となり、富山へ赴き『北陸政論』の主筆になっていた（1890-1893 年）。日本水利史に於いて名著の『治水論』を残し、その後上京して『時事新報』の特派員となり（1898 年前後）、また１９０１-１９０２年間、清国に渡航し大阪毎日新聞の記者として駐在していた。北京駐在中、いくつかの漢文による書籍も著し、呉汝綸氏ら中国のエリート知識人とも付き合いがあった。

1902 年中に帰国後、慶応義塾の教員になったが、一年足らずで辞して中国上海に渡り山西大学堂訳書院の翻訳となっていた（1903 年 9 月-1908 年？）。十数種の中国訳日本書（主として教科書）を著し、中国の近代学校教育に貢献したのである。

帰国後、京都私立中学校を創立し、爾来、学校教育に携わりながら、時勢に関心を寄せて多数の著書を残している。

但し、西師意の著作内容などについての研究は今後の課題とし、順次考察していく予定である。西師意の経歴についてはまだ分からない点も多く残されており、今後の研究に期したいが、本稿が西師意研究の一つのきっかけになれば幸甚である。

【注】

（1）　譚汝謙「中日之間訳書事業的過去、現在與未来」『中国訳日本書総合目録』, 実藤恵秀監修・譚汝謙主編・小川博編輯, 香港中文大学出版者, 1980 年。pp37-117 を参照。

（2）　徐冠華　邢云文「清末高等学堂科学教材编译及传播研究—基于山西大学堂上海译书院的考察」『編輯之友』2019 年 2 月。

（3）　一般財団法人京都高等学校のホームページ http://kyotokoutougakko.or.jp/による。

（4）　但し、『治水論』の奥付では、京都府士族　西師意となっている。

（5）　国立公文書館デジタルアーカイブ（DA）https://www.digital.archives.go.jp/による。

（6）　日本の総務省の本ページによると、

明治 4 年（1871）　戸籍法』制定　全国に区設置（行政区画）、戸長・副戸長配置

明治 11 年（1878）　三新法制定（郡区町村編制法・府県会規則・地方税規則）

明治21年（1888）　○市制町村制制定

https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/bunken/history.html

（7）　牛山鶴堂（1869-1906年）、明治時代の翻訳家、小説家、新聞記者である。明治15年に近所の温故義塾で西師意に英語などを学んだ。今井卓爾「鶴堂牛山良介について」『書物展望』第6巻第5号、第6号、書物展望社、1936年5月、6月を参照。

（8）　現在の名古屋市中区栄町3丁目辺り。

（9）　鵜飼新一（1985）『朝野新聞の研究』を参照。

(10)　鵜飼新一（1985）pp286.

(11)　鵜飼新一（1985）後ろからpp3～4。

(12)　ヨハネス・デ・レーケ　(Johannis de Rijke、1842年12月5日 - 1913年1月20日)は、オランダ人の土木技師。いわゆるお雇い外国人として日本に招聘され、砂防や治山の工事を体系づけたことから「砂防の父」と称される。日本の土木事業、特に河川改修や砂防における功績から、日本の農林水産省ウェブサイトに土木史の偉人の一人として取り上げられている。

1903年日本を離れた後、数年間はオランダに帰郷した。1905-1910年の間、中国上海の黄浦江改修の技師長として迎えられる。中国の河川管理にも貢献していた。1913年に71歳で亡くなる。／上林 好之『日本の川を甦らせた技師デ・レイケ』　(草思社、1999年12月)、日本農林水産省ウェブサイトhttps://www.maff.go.jp/j/nousin/sekkei/museum/m_izin/toyama_02/参照。

(13)　甲斐原一郎「治山治水・水利の古典解説一西師意『治水論』について一」、『水利科学』第12号、1957年7月、PP76-86.

(14)　市川紀一「デ・レーケの常願寺川改修工事における技術」『土木史研究第20号』2005年5月。

(15)　市川紀一（2005）を参照。

(16)　ぺりかん社出版の縮刷版『朝野新聞　33』を参照。

(17)　http://www.keio-up.co.jp/kup/webonly/ko/jijisinpou/1.html　都倉武之「時事新報史第1回『時事新報』の創刊」によると、

『慶應義塾學報』が創刊された明治31年という年は、慶應義塾の創立から数えて丁度40年目に当たっていた。その間、義塾に学んだ者の総数は1万余名に達し、その内卒業生は1800名に及ぶに至った。すぐれた思想家であり教育家であるとともに、たぐい稀な新聞人であった福澤先生が、こうした義塾社中を対象とした何等かのコミュニケーションの必要を感じ、毎月1回発行の機関誌の刊行を思い立った。

現在の『三田評論』に改題されたのは大正4年1月(第210号)のことである。

(18)　都倉武之「時事新報史　第1回『時事新報』の創刊」によると、『時事新報』は福沢諭吉の創刊した日刊新聞であった。都倉武之氏によると、明治15年に発刊され、ほどなく自他共に「日

本一」と認める高級紙になったが、時代を経る中でやがてその座を追われ、昭和 11 年末に静かにその歴史を閉じた。戦後いったん復刊されたものの、結局これも長くは続かなかった。

(19)　現在の東京都港区六本木一丁目辺り。

(20)　当時の日本の清国駐箚特命全権公使は内田康哉（1901 年 11 月 10 日着任、1906 年まで在任）である。

(21)　現在の山東省煙台市の中心区、第二次アヘン戦争以後、『天津条約』によってもともと通商港口として指定された登州の替わりに、1861 年に通商港口として開港。

(22)　田雁（2005）では、『実学指針―文華之光』の出版先のみが「河北訳書局」となっているが、誤植であろう。

(23)　呉 汝綸（1840 年 － 1903 年）、字は摯甫または摯父。清末の文学者・教育家。安徽省桐城県出身。1864 年に挙人、翌年に進士になり、内閣中書となった。曽国藩、後に李鴻章の幕府に入り、直隷の深州・冀州の知州を歴任した。両州に在任中に書院を開設し、自ら講義を行った。その後李鴻章の推薦で保定の蓮池書院の主講となったが、在任中には欧米の学問を積極的に取り入れた。1902 年、京師大学堂（現在の北京大学）の総教習となり、日本の教育制度の視察に赴いた。帰国後は故郷に戻り、桐城小学堂を開いた。（王暁秋『近代中日文化交流史』北京：中華書局、1992 年 9 月出版、趙爾巽主編『清史稿・呉汝綸伝』を参照）

(24)　王达敏：「论桐城派的现代转型」出所：ネット資料,Sanctus 2019-09-23 09:17:14

(25)　国立国会図書館デジタルコレクションの公開資料版本にはこの広告があるが、立教大学図書館大久保利謙文庫所蔵本にはない。

(26)　実藤文庫のコレクションには『実学指針―文華之光』と『史眼』の単行本がなく、『泰東之休戚』と一緒に『安論危辯』に収録されている。『安論危辯』に張晏清の手になる序文が寄せられている。

(27)　「中國哲學書電子化計劃」https://ctext.org/library で、ハーバード大学燕京図書館蔵の単行本の『実学指針』は閲覧できる。

(28)　愛新覚羅・溥良（1854 年 - 1922 年）、字は玉岑、満州鑲藍旗の出身。光緒六年（1880 年）進士。光緒二十六年（1900 年）9 月～光緒二十九年（1993 年）9 月、督察院左都御史に在任。『中国人名大詞典・歴史人物巻』上海辞書出版社、1990 年 2 月、pp630 を参照。

(29)　曾光光『桐城呉汝綸研究』（黄山書社、2014 年 2 月）を参照。

(30)　呉汝綸一行の訪日は 1902 年 6 月 9 日に唐沽から日本に向かい、6 月 20 日に長崎に到着、下関、神戸、大阪、京都、それ以外はずっと東京及びその周辺に滞在した。帰国したのは 1902 年 10 月 22 日である。汪琬 1998、ｐｐ198－218 を参照。但し、慶応義塾の参観は汪琬(1998)では言及していなかいようである。

(31)　孫知慧「近代仏教の東西交渉ティモシー・リチャードの仏書翻訳と仏教理解」を参照。
https://www.kansai-u.ac.jp/Tozaiken/publication/asset/bulletin/48/kiyo4820.pdf

(32)　以上の記述は徐冠華　邢云文「清末高等学堂科学教材编译及传播研究―基于山西大学堂上

海译书院的考察」『編輯之友』2019 年 2 月、及び　http://www.sohu.com/a/236892439_728245「校史 ｜ 訳書院及訳書考 」2018-06-2022:03 の記述によるところが多い。

(33)　徐冠華　邢云文（2019）を参照。

(34)　李提摩太.『亲历晚清四十五年:李提摩太在华回忆录』、北京:人民出版社, 2011 年,pp308.

(35)　英文原文は Timothy Richard, *Forty-five Years in China reminiscences (London 1916)*, available online at https://archive.org/details/fourtyfiveyears00richuoft/page/n8 による。

(36)　徐冠華　邢云文（2019)参照。

(37)　汪家熔 『中国出版通史　7　清代巻（下)』中国書籍出版社、2008 年 12 月、pp294-295.

(38)　金康彪「近代中国の数学教育における日本の影響に関する研究 ―和書漢訳数学教科書を中心に―」 『全国数学教育学会誌 数学教育学研究』 第 10 巻、2004 年、pp 65-171

(39)　一般財団法人京都高等学校のホームページ http://kyotokoutougakko.or.jp/による。

(40)　朱京偉「中国における日本製植物学用語の受容 ：20 世紀初期の中国資料を中心に」 『明海日本語』（明海大学, 2002-03）。

【参考文献】　（注に既出のものは省く）

汪向栄『清国お雇い日本人』（竹内実・浅野純一・中裕史　訳）朝日新聞社、1991 年 7 月 5 日

沈国威『近代中日詞彙交流研究―漢字新詞的創製、受容与共享―』中華書局、2010 年 2 月

汪琬『清末中国対日教育視察の研究』汲古書院、1998 年 12 月

さねとう・けいしゅう『増補　中国人日本留学史』くろしお出版、1970 年 10 月 20 日

黄福慶『清末留日學生』中央研究院近代史研究所（台北)、1975 年 7 月

陳力衛『近代知の翻訳と伝播―漢語を媒介に』三省堂、2019 年 5 月 31 日

荒川清秀『日中漢語の生成と交流・受容』白帝社、2018 年 3 月 30 日

王暁秋『近代中日文化交流史』中華書局（北京)、1992 年 9 月

国立中央図書館主編『中国近代人物伝記』中華叢書編委員会（台北)、1973 年 5 月

三省堂百年記念事業委員会編『三省堂の百年』三省堂、1982 年 4 月

汪家熔『中国出版通史　7　清代巻（下)』中国書籍出版社、2008 年 12 月

劉蘭肖『中国期刊史　第一巻（1815-1911)』石峰主編、人民出版社、2017 年 12 月

方光鋭『中国清末民初期の修身教科書と日本』東方書店、2019 年 3 月 31 日

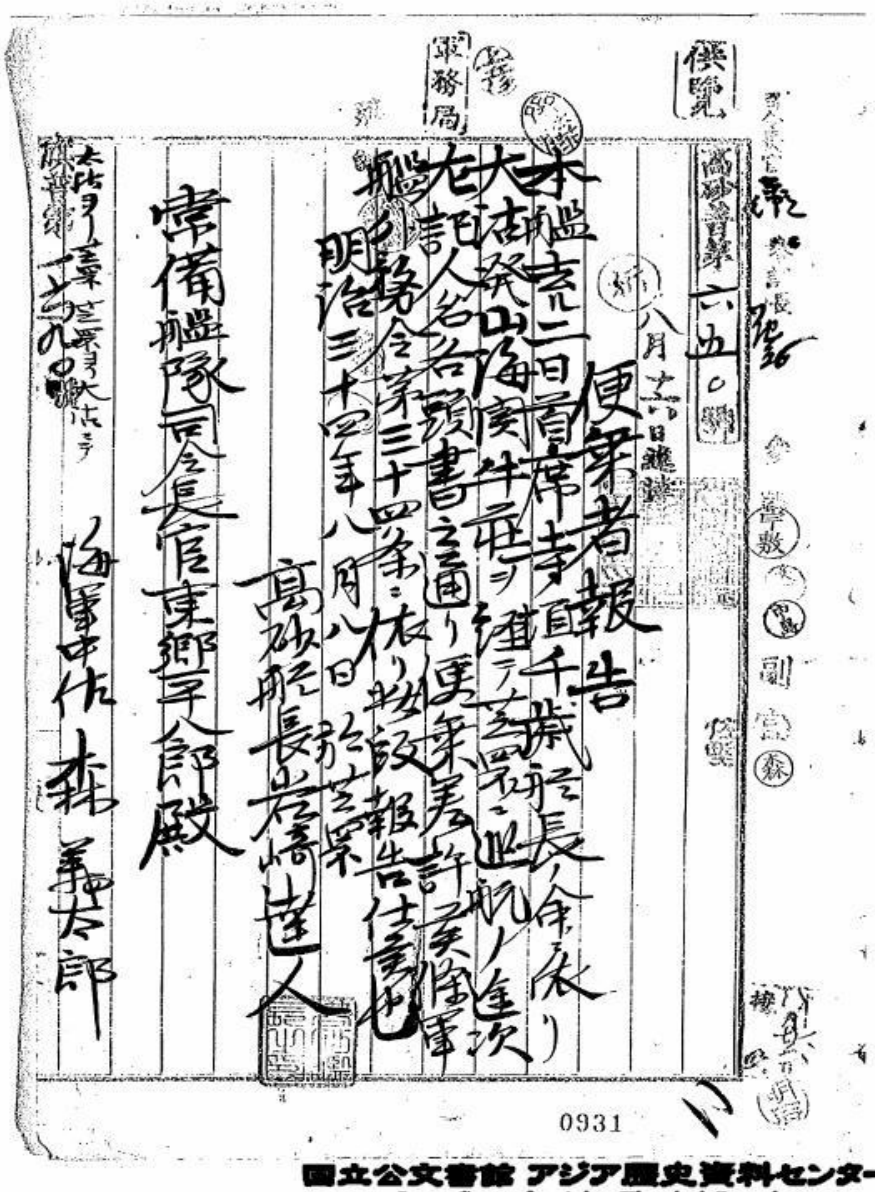
鵜飼新一『朝野新聞の研究』みすず書房、1985 年 9 月

上林好之『日本の川を甦らせた技師デ・レイケ』 草思社、1999 年 12 月

徐冠華・邢云文「清末高等学堂科学教材编译及传播研究―基于山西大学堂上海译书院的考察」『編輯之友』2019 年 2 月

肖朗・吳涛「中国大学初創時期的教材建設（1895-1912」『天津師範大学学報』、2014 年 02 期

【付録一】　「明治三十四年八月八日　高砂便乗者報告」



便乗者報告

本船ハ去ル二日台湾淡水港ヲ出発シ昨日当港ニ碇泊シタルニ此ノ度次記人名ノ者便乗ヲ願ヒ出タルニ付テハ軍務局ノ許可ヲ得タルニ付テハ便乗ヲ許可シ陸軍省令第三十四号ニ依リ其ノ旨報告ス

明治三十四年八月八日　於台湾

高砂丸船長　岩崎達人

常備艦隊司令長官東郷平八郎殿

陸軍中佐　森義太郎

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

海軍

0932

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp